

トゥー・ブラザーズ(Two Brothers)

2004(平成16)年9月26日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督・製作＝ジャン＝ジャック・アノー／出演＝ガイ・ピアース／ジャン＝クロード・ドレ
フェス／フィリピーヌ・ルロワ＝ポリュ／フレディー・ハイモア／ムーサ・マースクリ／
ヴァンサン・スカリット／マイ・アン・レー (日本ヘラルド映画配給／2004年フランス・イ
ギリス合作映画／110分)

……幼い双子のトラの「別れ」と運命的な「再会」。そしてそれに大きな役
割を果たす主人公の探検家と現地行政官の幼い一人息子。阪神「タイガー
ス」がダメだった2004年、双子の『トゥー・ブラザーズ』が観客に大きな感
動を与えてくれた。1920年代のカンボジアにおけるアンコール遺跡の勉強を
兼ねて、純真な心に戻ってみてはどうだろうか……？



予想以上に感動モノ！

私がこの映画の予告編を観た時、面白そうな映画だと思ったが、ドキュメン
タ的な映画だろうという先入観があったため、それほど期待はしていなかった。し
かし、新聞広告等を見ると、結構「涙モノ」「感動モノ」という評判だったので、
楽しみにしながら席に座ったが、予想以上の感動的なストーリーに感心！

舞台は1920年代のカンボジア。ジャングルの奥深くの地における、何とも珍し
い父トラと母トラの交尾場面。そして双子のトラ、クマルとサンガの誕生。しか
し、荒れ果てた寺院を拠点として平和に暮らしていたこの4頭のトラの家族にも、
いつしか人間の手が……。



双子のトラと人間とのドラマティックなストーリーに感動！

その人間の主人公はエイダン・マクロリー (ガイ・ピアース)。エイダンは有
名な冒険家で、長年アフリカのサファリで象牙を収集し、これをロンドンの上流
階級に売って、莫大な利益をあげてきたが、最近はその好みがかンボジアの仏像

に移ってきていることをオークションの現場で目の当たりにしたため、大きく方向転換。仏像の「盗掘」のため、地元住民たちの協力を得て、カンボジアの奥深くに入ってきたのだった。地元住民にとって、トラは人間の敵。エイダンの登場を歓迎し、村長も盗掘の許可を与えていたのだが……。

ここから話は二転、三転。エイダンの人間としての変化や成長、そして4頭のトラとりわけ双子の兄弟トラの成長と運命的な人生(?)を実にドラマティックに描いている。

ストーリーをうまく作っているのは、地域の行政官であるユージン・ノルマンダン(ジャン＝クロード・ドレフュス)とその幼い一人息子のラウル(フレデュー・ハイモア)という登場人物のキャラクター。とりわけ少年ラウルと赤ちゃんトラのサンガとの心の触れ合いは感動的。

この人間と動物との心の触れ合いは、映画の後半、エイダンの気持を動かし、最後の大きな「感動」に結びついていくことになる。あなたもきっと、この映画の波乱に富んだストーリー展開に感動できるはずだ!

もし、昨年上映されていたら……?

2004年9月27日現在、阪神タイガースは、勝率5割を割った4位。2003年の9月15日甲子園で歓喜の優勝を飾った阪神タイガースとは一変して、今年は昔ながらの「ダメ虎」に戻ってしまった感が強いので、その応援にも気力が湧かないというもの……。

新聞広告にも、「こっちのトラは元気だ!」と書かれているが、これは明らかに阪神タイガースへの「当てつけ(?)」であり、ちょっとキツイ……?

もし、この映画が今年の今頃上映されていたら、熱狂的なタイガースファンはきっと団体で映画館に駆けつけていたことだろう……。完成が1年遅れたのは、まことに残念……?

あなたは、トラの背中にまたがったことがあるか?

私は、今年6月10～13日、中国の桂林旅行に行き、その2日目、桂林の市内観光の際、七星公園の中にある桂林動物園を観光した。この時私は、トラの背中に

またがって写真撮影をする体験をし、その写真が2004年夏の事務所便りのトップを飾ることになった。ちなみに、その料金は20元（約300円）。よく飼いならされた、おとなしいトラだと思うが、正直私にはそれはよくわからない。

この映画には、主人公たちのトラとは別に、サーカスの中にいる「獐猛な人食いトラ」というネーミングとは逆に、年老いてほとんど役に立たなくなった1頭のトラが登場する。この役に立たないトラの使い途に困っていたサーカスは、ちょうどその時、「トラの皮が欲しい」という注文を受けたため、この年老いたトラの毛皮が売られていったが、年老いたトラか、それとも獐猛なトラかの区別は、私につくはずがない。

おとなしいトラだと信じてつても、その背中の上に腰を下ろすのはやはり、一瞬緊張するもの。生きた動物の背中の上にまたがるのだから、当然、そこは生暖かい。今でも座った私のお尻に伝わってきたトラの背中の生暖かさの感触は忘れられないもの……。

アニマル・トレーナーに感心！

パンフレットによると、この映画の撮影に使ったトラは30頭で、そのうち18頭が赤ん坊のトラとのこと。

また、「(セリフのわかった) トラ」、「コミカルな、生まれながらの役者」という、人間とトラとの心の触れ合いの解説があるものの、他方、「安全第一」「トラと危険」という現実的な問題点も紹介されている。

本当に、この映画全体を通じて、①トラの交尾、②トラの授乳、③赤ちゃんトラと異種動物との闘い（?）、④成長したクマルとサンガとの決闘とその途中でお互いを認識した後のじゃれ合い、⑤火の海の中に追こまれた2頭の兄弟トラのその窮地からの脱出、⑥人間と成長した2頭の兄弟トラとのフェイス to フェイスでの接触、等々、一体どのようにして撮影したのだろうと思うシーンの連続だ。これらの撮影を可能にしたのは、「アニマル・トレーナー」であるティエリー・ル・ポルティエの存在。

パンフレットの中で語っている彼の解説は、あまりにも夢のような話だが、実に面白いもの。

映画ではこんなことも可能となるのか、とあらためて映画という芸術のすばらしさと、アニマル・トレーナーであるティエリー・ル・ポルティエに感心。

インドシナ半島の歴史とアンコール・ワット遺跡のお勉強！

この映画の舞台となったカンボジアは、インドシナ半島にあり、長年フランスの植民地支配を受けてきた地域。タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムなどの独立のためのフランスとの戦いは、歴史的にも極めて重要な問題であり、そのお勉強は不可欠。

他方、12世紀に建造されたアンコール・ワットはクメール王朝の象徴だったが、13世紀以降、アンコール文化は凋落し、その寺院群は密林に覆われて人びとの記憶から忘れ去られてしまったとのこと。

これを蘇らせたのは、19～20世紀のフランスの研究機関。現地に入りこんでの調査の結果、次々とすばらしい遺跡が発見され、アンコール・ワットの遺跡群は、1992年ユネスコの「危機にさらされている世界遺産リスト」に登録され、世界遺産の1つとなっている。

政情不安定で危険が伴うだろうが、私も近い将来、是非見学したいものと考えている。

2004(平成16)年 9月27日記



2004年6月11日、中国の桂林動物園にて